

## 元島民が語る「北方領土」 —高橋節子さん・小濱暁子さん—その③

択捉島での暮らしから離れて長い年月が経ってしまいましたが、今でもふるさとへの思いを強く感じていらっしゃいます。

### そこで生まれ育ったロシア人を 追い出すことはできない

平成に入ってから一度紗那を訪れましたが、私たちが住んでいた当時より、現在のロシア人の方が多いくらの印象を受けました。父が択捉で暮らし、財産を築き上げたのが30年ですから、ロシア人の暮らしはその倍以上です。そこで生まれ育ったロシア人を追い出して、島を日本に引き取ることは難しいと、私は思いました。



▲左 高橋 節子さん 右 小濱 暁子さん



▲最近の紗那の町並み

### ふるさとへの思い

現在の紗那は、ロシア風のカラフルな建物が建ち並び、当時の面影はすっかりなくなっていました。年月が経つ程にますます私たちの記憶に残る紗那村の様子から遠のいてしまう感じがします。

お正月を迎えるたびに感じますが、私たちにはふるさとながないのだとしみじみ思います。私（節子）は東京で暮らして70年経ちますが、東京をふるさととは思えない。やっぱりふるさとにはふるさとなんです。だから根なし草みたいだと妹とよく話しては悲しくなります。

納沙布岬から北方四島を見たことがあります。引き揚げ後は東京で暮らし、択捉島の話にはあえて触れず、背を向けて過ごしてきた私でも、四島の姿を見たら悲しくて悲しくて、あふれる涙が止まりませんでした。

### 島へ帰れるようになったら

今となっては自分の年齢を考えてしまいますが、故郷が存続してほしいと思います。平成4（1992）年の墓参で、傾いて埋もれてしまった先祖の墓を直そうとしましたが、僅かな時間で、しかも人の力だけではどうにもできませんでした。お墓は私や先祖がそこにいたという証だから、それだけは何とかなしたいと思えます。

紗那で見つけた先祖の墓 ▶

